

今回は、自然科学部・地域研究部の領域横断型研究の報告です！

◇ まぼろしの関飛行場と地下壕の跡

関市大杉のふるさと農園から、美濃加茂市稲辺、坂祝町深萱の日本ライン自動車学校付近にかけて、広々とした畑が広がっています（右写真上）。

第二次大戦末期、この地に陸軍の飛行場がつけられました。平坦な地形は、かつて滑走路として整備された痕跡です。本土防衛に備えて作られた秘匿飛行場であり、本土決戦時には特攻基地としてもちいられる予定でした。飛行場の周辺の山々には、燃料や爆弾を保管しておくための地下壕が計180余り掘削されたといわれています（関市史1967）。



地域研究部地質学班は、東田原から加茂野に続く台地の地形及び土壌形成を調査するため、地質図を参考に地下壕が掘られた丘陵をめぐり、各地で岩石サンプリングを行いました（右写真下）。

母岩はおおむね凝灰質の砂岩もしくは泥岩であり、場所によっては複雑な褶曲や断層構造がみられます。概して軟弱であるため、かつて掘られた地下壕の大半は、崩落した土砂で埋もれる結果となりました。



◇ 当時を知る方々からの聞き取り調査

令和3年4月3日午後、ふるさと農園の芝生広場に、飛行場があった当時のことを知る高齢者の方々8名に集まいただきました。我々が話をうかがったこの場所が、滑走路の離陸地点付近であったそうです。

戦時中は国民学校に通う少年であり、75年前、飛行場が造成された当時のことを思い出し、まわりの方々と確認しながら丁寧に語っていただきました。

2時間以上に及ぶ録音データと膨大なメモは、これから整理し、遺跡踏査の知見と合わせて、今夏行われる全国郷土研究発表大会の場で発表する予定です。



◇ 戦争体験を語り継ぐ意義

戦後75年を経て、戦争を直接体験された方々の記憶も、徐々に薄れつつあります。

関市・美濃加茂市・坂祝町にまたがる広大な地にかつて陸軍の飛行場があったこと。陸軍機が土けむりを立てて大空に飛び立っていたこと。兵士のみならず地域住民も滑走路造成工事に駆り出されたこと。中には朝鮮半島出身の労働者もいたこと。周辺の山々の地下壕や寺社などが爆弾・燃料の秘匿地として使用されたこと。

こうした証言の数々を正しく記録し、次の世代に伝えていくことは、ふるさと教育の大きな課題であると言えます。